平成二十年六月十五日(日)　駒込学園

川柳マガジン東京句会六月特別企画

川柳研究社句会参加

※抜句中の太字は川マガご参加の方になります。

「流れる」いしがみ鉄選

テロップへ知人案じる震源地　今日子

ホコ天の流れを変える殺人鬼　克己

港町店に銀座のマッチ箱　こまり

雑魚は雑魚なりに社のため流す汗　健太

流木のオブジェが光る応接間　弧舟

急流に出世をしない石もある　美文

自分史の岐路に時代の歌がある　由紀子

リベートの臭いに理性流される　多聞子

泣いたのは夫流れを妻は読む　美和

マスカラが流れるほどに愛してる　帆波

濁流の四万十に遭う雨の旅　紀楽

流し目に会って磁石が狂いだす　幸一

電子マネー財布の口は垂れ流し　今日子

川は流れ流れてひばり行ったきり　暹

イントロが流れマイクは裕次郎　典男

故郷の川反骨の魚が住み　ふきこ

歌麿の線が涼しい柳腰　勲

お流れを待つ末席の自尊心　弧舟

そのあとに現実が待つ花筏　暹

生きている証拠だ君のその涙　三十六

クラシック恋の序曲へしてくれた　国松

国籍へ僕も私も日本の血　きみ

ファックスの誤送へ闇が深くなる　和子

ちっぽけな悩みと気付かせる大河　京子

頬伝う汗も気付かぬ匠の手　克己

「五客」

正論の命と流れ星を見る　駱舟

巨星落つその夜は青い星流れ　紀楽

流されたところ私の現在地　渓舟

モンタンのセーヌ流れて父眠る　淳隆

委任状不足総会不成立　尉

「三才」

人生きるって何か教えておーい雲　京子

地幻想の愛と漂う少年期　きくこ

天桃はもう流れてこない目黒川　幸子

軸名画座でまた感動を呼ぶ涙　鉄

「庭」斉藤由紀子選

父祖の庭は細切れ税に食べられる　梢

花いっぱい植え中流の庭にする　ふきこ

招かれた庭だ素直に褒めておく　紀楽

坪庭といえども四季に急かされる　淳隆

庭付きの戸建が決めたIターン　今日子

不器用に生きてる庭の箒草　幸子

タクシーを待たせてしばし竜安寺　尉

屋上の庭が自然の衣着る　貞水

坪庭の竹遠慮なく天に伸び　弧舟

庭園にされ屋上も忙しい　多聞子

庭下駄の宿門限があるらしい　尉

妻病んで庭から四季が奪われる　多聞子

庭履きの音に律儀な錦鯉　弧舟

セールスが庭の花から攻めてくる　典男

雑草を抜けば寂しい庭になる　きくこ

坪庭のゴーヤが上げる自給率　淳隆

盆景に凝って器が小さくなる　淳隆

借景の富士マンションに庭がある　勲

早起きの庭でオゾンを食べてくる　多聞子

リハビリの庭で命の四季を読む　和夫

無料パス都内私の庭にする　克美

箱庭へバブルの頃の夢を見る　東風

ガーデニング猫の額を競い合う　梢

二幕目が家裁の庭で開くドラマ　健太

石庭へいつしか自我が溶けている　東風

「五客」

自画自賛するバラ園の老夫婦　孤舟

ホスピスの庭で祈りも走馬灯　光柳

石庭の箒目哲学を喋る　勲

遠州の庭で心の掃除する　梢

（参照・小堀遠州）

ホコ天の庭にナイフが突き刺さる　闘句朗

「三才」

人　枯山水自然を庭にどんと置く　あきら

地　箱庭で病んだ心を遊ばせる　無呼名

天　アメリカの庭に咲いてる日章旗　勲

「しっくり」中島和子選

本当に鬘なのかとまた見つめ　みの里

尼寺の詩情を紫陽花が見せる　由紀子

肌色の違いが抜けぬ世界観　今日子

和解して時々動く腹の虫　和夫

匿名の世界が肌に合いすぎる　帆波

同族のピンチへ策がまとまらず　鉄

民話聞く胡坐温めている地酒　さくら

影武者が影まで似せるプロ意識　さだお

学閥の隠語が癒し系となり　駱舟

磨り減ったペンを握ると物が書け　健太

一匹の男が好きな裏通り　梢

腕組みが溶けて一本締めとなる　南山

あの嘘が今も効いてる夫婦仲　成子

宮大工木の喜びを音にする　貞水

営業の笑いは別に用意する　多聞子

銀シャリと味噌汁が組む名コンビ　建八郎

今日だけは相手を責めぬペアルック　正之

白線の通り間を置く嫁姑　幸子

ツーショットゆっくり腕を組みかえる　春雄

フェロモンもたっぷり膝の耳掃除　建蔵

すこし惚け安楽椅子が軋まない　紀楽

凡馬快走ジョッキーと鞍が合い　紀楽
飼育歴妻の手綱が柔かい　勲
住み慣れるただそれだけで和む街　暹
友情の喫水線が揺れ動く　孤舟
「五客」
夫よりペットの方が睦まじい　さちを
一致した訛り口論萎えてくる　駱舟
下町のほかは知らない金魚鉢　今日子
一献の美酒いがみ合うエゴを埋め　克美
ニガウリを愛でる男の太い眉　梢
「三才」
人　ニートの絵ママのお膝が良く似合う　勲
地　どこにでも馴染む背骨の処世術　あきら
天　制服と防衛ごっこする背広　淳隆

「極　端」　安藤紀楽選

天国を血祭りにしたレンタカー　貞水
生か死かたかが受験に気負い過ぎ　国松
学校はおから役所は凛と建ち　みの里
札束を見せると豹が猫になる　ふきこ
降る時はまとまって降る温暖化　芳夫
金持ちと睨みホステス媚を売り　渓舟
常識の突破ずれなる学者馬鹿　さくら
好き嫌いだけで決めてる青りんご　光柳
負け組みの椅子で奈落の絵だけ描く　由紀子
飴玉も鞭も太らす成果主義　勲
気に入らぬ部下にはいまだ声かけず　泰磨
影までが痩せてしまったダイエット　美文
生き様に似て三振かホームラン　今日子
どうせならいい悪役と呼ばれたい　芳夫
年金でお隣さんは旅もする　あきら
好きという酔狂もあるクサヤ焼く　幸一
神の手を滑り落ちてる自爆テロ　由紀子
手術台神と悪魔がすれ違う　和子
東京を描けばヒルズと青テント　梢
中国の漢字を頼りなく眺め　駱舟
一円という入札が悩ませる　暹
限界を超えたスーツが呼ぶ記録　さくら
大衆の胴上げ落とすこともある　勲
給食費未納ベンツに乗ってます　暹
究極のグルメ未来は水空気　成子
「五客」
過半数取ったとたんに居丈高　国松
ルーツはどこへ整形のミステリー　梢
テレビ見て妻が納豆ばかり出し　建八郎
活性化すると酸素は狂いだす　幸一
中国の顔が見えない貧富の差　和子
「三才」
人　喫水線超えると酒が牙を剥く　弧舟
地　究極の明暗を描く原子の火　成近

天　反日を謝謝にした震度八　みの里

軸　温度差百度へよく耐えた三浦さん　紀楽

「当意即妙」　飛松典男選

趣味で得た盾履歴書は取り合わず　勢陵

強盗が手ぶらで逃げた非常ベル　南山

場の空気読んだ駄洒落に救われる　三十六

火事現場咄嗟の布団下で待ち　渓舟

ばれそうな手品は先に種明かし　渓舟

子の嘘を上手に叱る親の嘘　多聞子

仲裁のチャンスうかがう子の機転　三十六

強打者がスクイズという手も使い　今日子

相槌も入れて収める苦情処理　光柳

詐欺らしい電話にボケている演技　きくこ

論敵へ洒落たジョークで楔打つ　利江

振込みの電話へ取りに来いと言い　淳隆

姑へ嫁の話芸が止まらない　みわ

熊だって承知の上の死んだ振り　今日子

緊急度被災者区別医療班　以呂波

夕立に早めに出した縄暖簾　節子

この辺でボギーを接待のゴルフ　成近

ほどほどを超えて頓知が鼻に付く　かよ

臨機応変受付はたじろがず　和子

若者の打てば響くを煙たがり　さちを

美しい嘘なんてない癌告知　美文

嘘は駄目法螺は許すと言った父　一平

国賓のジョークに通訳の機転　成近

アドリブを待つ台本にある余白　尉

落研で育ち揚げ足食べたがる　多聞子

「五客」

絶対に嘘と思えぬ上手い嘘　千枝子

欠勤へ流行り病を匂わせる　健太

本人は留守と本人譲らない　倫也

幾つもの持病誰にもアドバイス　正之

一喝を貰い少年立ち直る　美和

「三才」

人　父の日の留守番やはり父の役　正之

地　録音言えば振り込め詐欺が消え　国松

天　音痴にも合わせ老妓の撥捌き　南山

軸　ああ言えばこう言う僕は川柳家　飛松

「オアシス」植竹団扇選

次のオアシスへ隊商荷を纏め　多聞子

この橋を渡るときっとある楽土　幸子

地下水を当てて砂漠に村ができ　貞水

家出した子の行き先は保健室　典男

名刹の写経をなでる獅子脅し　さくら

オアシスを一瞬破壊するナマズ　暹

オアシスに乾かないでとラップかけ　一平

懸案も片付き低いそば枕　さくら

軒先をツバメと借りる雨宿り　南山

ロブノール砂のロマンはエンドレス　きくこ

未来図を紡ぐ観覧車の夜景　弧舟

副都心線オアシスに行けますか　暹

駅裏に昼間の愚痴を捨てる店　あきら

正論の傷口居酒屋で洗う　駱舟

居酒屋の暖簾ノルマを遮断する　勲

ウオーキング途中に学食を見つけ　尉

運動会敬老席に屋根があり　今日子

ナルシスト鏡と会話する時間　梢

極楽に一番近い妻の膝　克美

ここだけは社長鎧を脱ぐ屋台　みの里

寄席の灯へ肩凝り頭痛駆けつける　駱舟

オアシスに硫化水素を置くネット　紀楽

散らかっているから書斎心地良し　美文

茜空紅茶で閉じる庭いじり　成子

混浴のオアシスがあるパラダイス　絵扇

「五客」

くしゃみする間欠泉へ身を委ね　東風

花ござの褥でしばし空になる　淳隆

少年のオアシスだった秘密基地　闘句朗

窓際だけれど休まる俺の席　淳隆

帰任してまずは馴染みの理髪店　紀楽

「三才」

人道路税黄泉への道も整備する　建八郎

地民宿の自給自足の膳に酔う　梢

天一人飲む酒の肴に広辞苑　芳夫

軸洞爺湖に寛いでいる暇はない　団扇

川マガ参加者　18名

三十六、京子、渓舟、淳隆、闘句朗、成子、芳夫、利江、以呂波、一平、千枝子、倫也、絵扇、竜雄、くんじ、きみ、団扇、帆波、

今月は「川柳研究社」さんへ出張勉強会です。川マガと川柳研究さんは会場が同じですので、いつも両方に参加されておられる方もおられましたが、初めてご参加の方が5名。私のように久しぶりの参加の方もおられました。川柳マガジンとしてご参加いただき、レポートをいただいた方は15名でした。

川柳研究社句会参加者は60名。数名のご投句でのご参加もおられましたので、70名を超えるご参加だったようです。

川マガの皆様には出句後、選考の合間に川柳の句会が現在のようになった流れをかいつまんでご説明いたしました。

川マガ参加の皆様の結果は太字で表記してございます。

以下、皆様からのアンケートの結果です。それぞれのご意見は、無記名ということでご了承くださいませ。

一、川柳研究社句会に参加して感じたこと。

・句の「作り方」が上手

・選考に特徴があり、自分の作風とは違った。以前聞いたことのある句もいくつかあった。

・レベルが高いと感じた。

・選考が甘い感じがした。参加者が増えても同じ抜句数でいいのでは。

二、披講を聞いて、今後の参考になったこと。

・生活感が無い。句会の場の外で通じるかどうか。

・同一発音の文言はあらかじめ説明を入れてから披講に入ったほうがよいのでしょうか？

・「当意即妙」は課題とずれていたように感じた。

・「極端」は選者の好みが出ていたと感じた。

・もう少し勉強しなければと思いました。

・披講のテンポが速い。初めての人には聞き取れないと思う。もしくは、ある程度決まった表現や言い回しがあるので、早くても何時も出ている人には判るのかとも思った。

三．印象に残った作品

・お流れを待つ末席の自尊心　弧舟

・巨星落つその夜は青い星流れ　紀楽

・二幕目が家裁の庭で開くドラマ　健太

・一匹の男が好きな裏通り　梢

・東京を描けばヒルズと青テント　梢　②

・マスカラが流れるほどに愛してる　帆波

・無料パス都内私の庭にする　克美

・箱庭で病んだ心を遊ばせる　無呼名

四、よく判らなかった作品

・制服と防衛ごっこする背広　淳隆

・桃はもう流れてこない目黒川　幸子③

五、その他

・すこし違和感がありました。

・「桃はもう流れてこない」が選ばれたのは意外。昔からよくある着想で、下五を変えればその土地その土地の句になってしまう。暗渠化された川のこと。「開く事のない水門へ（水門を）」に下五を加えるのと同じ手法。

以上。

波

整理・松橋帆